

皇居のお堀は野鳥の楽園となっています。1月22日に東御苑を散策しました。入り口の「大手門」の右側に広がる「大手濠」はヨシガモ、オカヨシガモ、ハシビロガモ、ヒドリガモ、オオバン、コブハクチョウなどで賑やかでした。この写真はナポレオンハットのヨシガモです。潜水して餌を捕ってきたオオバンから餌を奪い取るシーンも見られました。粕谷

紅葉台



新聞

第227号

2026年

3月28日

発行人：関谷 孝

「卒年」によせて 関 邦義

○午…十二支の第7。動物では馬に当てる。(『広辞苑』第7版) 今年が「午年」ですので、今回は「午」について取り上げてみたいと思います。

まず、「午」ですが、「牛」という字に似ています。ただ、「牛」にはある「つ」が「午」にはありません。ご存知のように、「馬」を表します。その「馬」を私のお気に入りの辞書である『言海』(大槻文彦)で引いてみましょう。

○うま(名)馬…(一)牧ニ飼ヒ、家ニ畜ヒテ、人物ヲ載セ、又、車ヲ牽ク等、最モ用アル獸、人ノ知ル所ナリ、高サ四尺以下ヲ駒トシ、四尺以上ハ寸(キ)ヲ以テ計リ、八寸ニ餘ルヲ長(タケ)ニ餘ルトス、面長クシテ鬣(タテガミ)アリ、蹄圓クシテ底凹(クボ)メリ、尾ノ長サ、身ノ高サニヒトシ、前齒ハ、上下、各、六枚アリ、コレヲ見テ老少ヲ知ルベシ、毛ノ色種種ニシテ、名目多シ。(二)雙六(スゴロク)ノ采(サイ)。(三)物ノ、常ニ異ナリテ、大ナルモノノ稱。「一 蛭」「一 ウド」「一 芹」※文中「寸(キ)ヲ以テ計リ」の「寸(キ)」は、「馬の背の高さをはかる単位」のことです。

ところで、(三)の「物ノ、常ニ異ナリテ、大ナルモノノ稱」についてですが、日本で最も売れているといわれる『新明解国語辞典』(第八版・三省堂)では、次のように説明しています。

○うま【馬】(造語)同類の動植物の中で、大きい方。〔植物の場合は、人間生活に有用でない物をも指す〕「一 ゼリ」面白いと思うのは、『言海』では、「最モ用アル獸」と称されている馬が、『新明解国語辞典』では「植物の場合は、人間生活に有用でない物をも指す」と説明されていることです。ここで思い出すのは同『新明解』の「犬」の項目です。



○いぬ【犬】(造語)○役に立つ特定の植物に形態上は似ているが、多くは人間生活に直接有用ではないものであることを表わす。にせ。「一 タデ・一 ツゲ」

「馬」も「犬」も人間にとって、相当役立っており、有用であるはずなのに植物に用いられると、途端に有用でないといわれるのはいかなる理由によるのでしょうか。

【問題】次のことわざ・慣用句で空欄()に「馬」が入るのはどれか、記号で答えなさい。

ア.()の耳に念仏 イ.()にひかれて善光寺
ウ.とらぬ()の皮算用 エ.尻()に乗る
オ.()の遠吠え カ.()が合う キ.()の骨



ク.()に小判 ケ.()の威を借るきつね コ.()脚を現わす (ヒント 馬・牛・狸・犬・猫・虎が当てはまります)

「左馬」について

続いて、皆さんよくご存知の商売繁盛・招福等、縁起物の文字とされる「左馬」について取り上げます。「左馬」が縁起物とされるには、いくつかの理由があるようです。国語辞典で調べてみましたが『広辞苑』(岩波書店)では理由までは載っていませんでした。『大辞林』(三省堂)では次のような説明がありました。

○「うま」を逆に読んだ「まう(舞う)」が古来めでたい席で催されることから。

○「馬」の字の下の部分を財布の巾着に見立ててお金がたまることから。

これでは、ピンとこず、理解が十分ではありませんので、『日本大百科全書』や『ブリタニカ国際大百科事典』で引いてみましたが、そもそも「左馬」自体の項目(見出し語)がありませんでした。

そこで、いよいよパソコンの登場です。AI の回答は次の通りです。

1. 「うま」を逆に読むと「まう(舞う)」となり、お祝いの席で踊られる「舞い」を連想させるため、福を招くとされています。また、通常は人が馬を引きますが、左馬は馬が人を引き入れる(千客万来)という意味合いから、商売繁盛につながるとも言われます。



2. 「馬」の字の下部が財布の巾着袋に似ていることから、お金が逃げず、財が集まる富のシンボルとされています。

3. 馬は左側から乗ると倒れないと言われ、人生につまずかない

「右に出るものなし」といった意味合いも持ちます。

以上、1と2は『大辞林』とほぼ同じ内容。3が追加されています。

何事も「うまくいく」年になるといいですね。

粕谷和夫の観察日記



1月24日、八王子・浅川の中央線鉄橋付近です。カワウとダイサギと一緒にいることがよくあります。その場合カワウの大集団が潜水して魚の追い込み漁の時に水面近くにきた小魚を狙うダイサギの集団という場面が多いです。しかし、この日は4羽のカワウと1羽のダイサギという分かりやすい組み合わせでした。この写真では全てのカワウが顔を出していますが、盛んに潜水し、その近くでダイサギが魚をとっていました。

紅葉台新聞は、「高尾フモト同盟」のHPに公開されています。高尾の情報や働く人たちが紹介されています。興味を持った方は、覗いてみてください。また、皆様からの情報や投稿もお待ちしています。